

機管理は日常的な課題であった。とても厳しい事態への対処を求められたこともある。

いなほ保育園のように勇敢な営みを行っていて、危険とどう向き合っているのか、読んでいて常時気がかりであった。読了しても答えは得られなかった。

しかし、「隣にいて、あの子は木から落ちるかしら」とか思ったら、その子は本当には自分が解放されないのよ……そういうものがみんな子どもを引つ張っちゃうから、それは全部捨ててください」と保育士へ園長は説得している。そこに糸口が見えた。

子どもはスリルを愉しみ、冒険心を抱き、危ういところを求める過程で、生きるための火種を点火してゆく。そのことを園長はしっかりと見据えているのであろう。

だから、構造上のことにとどまらず、子どもと交わる職員的心情においても、子どもの本質である冒険心に水をさすことはしないしてほしい、と求めていると推量した。

事故が起これば、責任者がそれなりに対処して責めを果たすしかない。

い。ここで開き直りできるか否か、子ども関連機関の長は求められている。

腹をくくれば、思い切って成長するにはいろいろなことがある、「その分だけ危険もいっぱい。こつちもはらはらしながら、成長を楽しめるとき」なのだという。正解。

親も、保育されるかのように園の営みに巻き込まれてゆく。

さまざまなところで親は財政厳しい園を支えている。求められてはなくて、いつとはなくそんな気分になつてゆくようだ。

催しに参加する親は、子どもたちが展開する世界を一心不乱に見つめているという。写真を撮る親がいなくて、というのはすごい。

いまどきの親はたいいてい、わが子の実像を直視することを回避し、写真やビデオという虚像へ収めることに腐心する。後で見直しても（それもなかるうが）、もう子どもの実像は過去に去つていく。

子どもが持つ内発的なそだちの可能性を確信した、勇猛果敢な魂を持つ人が、細心の計算と加齢を省みぬ

肉体のきしみを重ねて成立したミクロコスモス、それがここにある。

これほど不思議な保育園は、ほとんどないであろう。こんなに奇想天外な園長も居なからう。

強烈な個性と感性に支えられて成立している保育園、園長が退任した後はどうなるのか、と老爺心も湧いてくる。

すべてがよい、というものは人の世には存在しない。このように自由闊達な保育園に自閉症の傾向を

村田豊久著

『子ども臨床へのまなざし』

持つ子どもがやってくれば、あまりに粹のないことに戸惑い、パニックに陥る危険がある。

昨今の保育園は仮名の読み書きなど幼児教育へ踏み込むところが目立ってきている。

そのような流れに疑念を抱き、時流の対極に立つて子どもの自然なそだち力を考え直す。そんな書物として、本書を紹介した。

清水將之
(しみず・まさゆき／三重県こども局)

本書は、長年子どものころの医学界において徹底して臨床に身を置いて子どものころの発達と治療に取り組んできた著者が、この分野を志してから長年書き留めてきた総説やエッセーなど二四編の論考で構成されている。そこには学術論文にはない著者の人となりが見み出ている。読者は一気引き込まれていく。著者の講演を聞いたことのある者

は、その鋭い臨床眼に瞠目しつつも、他者への深い思いやりと優しさ、そしていつも他者へのサービスピリットに魅了されたのではなからうか。そうした人となり本書の至るところに感じとられ、ライブの講演を聞いていたような錯覚に陥るほどである。「文体は人を表す」を地味に持っている内容である。評者は著者

の日常臨床場面に長年陪席した経験をもつが、著者の子どもと接する時のそれは、診察なのか、遊びなのか、それとも……なのか、判然としないほどそれらの要素が互いに溶け込み渾然一体となった名人芸の世界である。本書にもそのような場面を彷彿とさせる記載が随所に顔を出している。

子どもの臨床において著者の関心は広く深い。子どものうつ病、神経症、さまざまな発達障害、さらには自閉症……。本書では掲載されていないが、著者が子どもの精神医学領域に進む前には精神分裂病(当時の呼称)の予後研究でわが国を代表する学術研究論文をまとめていることはこの領域でよく知られている。その経験がその後自閉症の追跡調査研究として結実することになるが、その勤所は揃んでいたとさり気なく記述している箇所に、著者の臨床眼の確かさに対する自信のほどを垣間見ることができている。

ついで特記すべきは著者の臨床における着眼点とその先見性である。それが如実に示された研究のひとつが、本書にも掲載されている子ども

のうつ病研究である。著者も追記に述べているように、著者のグループ(評者も共同研究に関与していた)が当時学会発表した時には、子どものうつ病については否定的見解を示す者が大半を占め、学会場ですぐに手を挙げて発言した当時の児童精神医学会理事長は「子どもにはうつ病はない」と断言し、発症者の先見性を理解できなかったのである。それが二〇年後の今では、子どもにうつ病がみられることを誰しも疑わない。先見性の高い者であれば誰しも味わう周囲からの風当たりの強さとそれを理解できない者たちとの悲しいまでの深い溝である。

なぜこれほどまでに著者の臨床能力は磨かれていったのか。著者の在籍していた九州大学神経精神医学教室の精神病理研究室には、当時から錚々たる面々が連なっていた。池田敏好、桜井國南男、西園昌久、山上敏子、神田橋條治、牛島定信各氏などがすぐに思い浮かぶ。驚くべきことに彼らすべてが、わが国の臨床精神医学分野で各々独自の主導的役割を果たしている。

この教室がそのような人材を生ん

だのはなぜか、その秘密の一つを垣間見る思いがするのは、著者が子どものうつ病についてわが国の書に最初に記載したものとして森田正馬と下田光造を引用している箇所である。この研究室の歴史に燦然と輝く大先輩の業績を丁寧に紐解き、そこに今でいうところの子どものうつ病の心理構造と性格状況論を再発見して己のものとした臨床の着眼点が見られている。すぐれた臨床家が育つためには、すぐれた先達者の足跡を大切にす臨床的風土が不可欠であることを思い知らされる。本物の臨床の伝統は一朝一夕には育たない。長年の真摯な臨床活動の積み重ねがあつてこそなのである。そのことを改めて痛感させられる。

本書のもうひとつの特徴は、著者の真骨頂である臨床事例の生き生きとした描写である。さまざまな病態を示す子どもらの背景としてのころのありように子ども目線でのまなざしを常に注ぎ、子どもらが見せる大人たちへの鋭い視線をも鮮やかに彼らのことばで活写する。

本書を閲覧して改めて気づくのは、その事例の多くが一〇歳から一

二、三歳の前思春期から思春期前期の子どもたちであることだ。その秘密が「学童期をめぐって一六〇年たった今でも消えないあのころの恐怖、みじめさ」で赤裸々に語られている。編集部からの依頼「学童期をめぐって」の意図は臨床を通してこの時期の子どもの特徴を描き出すことであつたはずだが、著者はみずからの学童期体験を語らずにはいられたなかつたのだ。

その理由は本章を読み始めた途端に浮かび上がってくる。そこには著者の戦争体験が生々しく語られているのだ。大人から手榴弾を手渡され、一度は死をも覚悟したこと、極度の空腹感から子ども同士のけんかが入らず、以前誇っていた腕っ節の強さが消え去り、惨めなほどに負かされたことなど。このような恐ろしく惨めな体験が生々しく蘇っているのだ。

大学教員定年後、自宅の敷地内に建設していたクリニックにおいて、再び老骨に鞭打つてこの年頃の子どもたちに相対し、彼らのころのあの原体験である。みずからの人生体



日本評論社、2009年
3465円（税込）

験がこれほどまでに臨床への強い思いとなり、いまだにその火が熱く燃え盛っていることに、著者自身素直な驚きを記している。

こころの臨床に従事する者たちが、助けを求めてやってくる人たちにどう向き合うか、そこではわれわれのこれまでの生き様がことあるごとに映し出され、子どもたちへの理解の深さとして試される。そのことを体現している著者の記述は、後に続く臨床家への厳しくも可能性を拓かせてくれる送り言葉として胸に響く。

なんとといっても本書の圧巻は、最後の部「自閉症児とともに育つ」である。九州大学での最終講義「自閉症の生涯発達」を読むと、その歴史とともに著者の自閉症の人たちに向けてきたまなざしがどのようなものであったかがわかる。

いまや絶版になって久しい自著

「自閉症」（医歯薬出版）は名著として名高いが、そこで示された自閉症への確かな臨床眼は本書でもうかがい知ることができる。この半世紀の

あいだに大きく揺れ動いてきた自閉症の成因をめぐる論争の中に身を置きながら、一貫して自閉症の子どものたちのこころにいつも暖かいまなざしを向けていたことがわかる。みずから控え目に、これまで大きなぶれを起こすことなくやってきたことを述懐しているが、当時大半の自閉症研究者が言語認知障壁仮説に大きく舵を切り、それ以外の学説を過去のものと封印してしまったことを考えると、その臨床眼の確かさに驚かされる。徹底して臨床を通して考え抜くことの大切さを改めて教えられる思いがする。

その端的な例として、心の理論の偽信念課題「花子の誕生日」でみせた子どもたちの反応に対する著者が示した理解のあり方を挙げるることができる。誕生日のプレゼントに好きなウサギをもらえると期待していた花子が実際には百科事典をもらった。それでも花子が「ありがとう」と礼を言った。その時の花子の本当

の気持ちはどんなものだったかを問う課題である。

ある自閉症の子どもは心底うれしくて礼を言ったと述べた。そのわけは「百科事典にはウサギのことがたくさん書いてあるから」だという。

この子はプレゼントを送った人のこのころの裏を読むことはできなかったかもしれない。しかし、このような自閉症の子どもたちの自分たちが考えつかないような着想に、著者は限りない愛着、そして人間としての尊敬を覚え、ともに暮らしたい、ともに生きたいと心底願っている。これは単なる自閉症への讃歌ではない。名実ともに著者自身彼らとともに生きるということをごく自然に実践してきたから言えることばである。

公私ともども可愛がっていたのだ。評者は知っている。著者が自閉症の子どもたちを自宅に呼び、家族と一緒にあって時間を過ごしていたこと、療育キャンプに自分の子どもを連れて行ってともに楽しんでいたりしたことを。自宅の敷地内に建設されたクリニックの建物を見ただけで心休まるのだ。

これまでの彼らとのかかわりを振

り返り、どのような関係であったかに思いをめぐらした時、自宅に自閉症の子どもたちがやってきたとき、娘が「お父さんのお友達が来たよ」と呼びにきたことを引き合いに出し、このことは最も実態を映し出している」と述べる。

みずからの臨床の歴史を振り返り、こんなことを語れる臨床家がどれほどいるであろうか。児童精神科医療でメシを食うことなど至難の業であると、その経済的な実態をも赤裸々に語る著者がこれほど自信をもって語れた背景には、いつもその背景に家族ぐるみの応援があったのではないか。そのことを示すエピソードを最後にひとつ。

著者が児童精神科医になった時に多大な影響を受けた学者のひとり、自閉症の提唱者として有名なレオ・カナリーがいた。著者は最初の愛娘が生まれた際に、カナリーの名を拝借して「かなな」と名づけている。カナリーは当時「カンナ・Kanner」と呼ばれていたからである。ここに著者の自閉症と家族への思いが象徴的に示されている。

最初にお断りしなければならな

ったかもしれない。評者は二〇歳の時、自閉症の療育ボランティア活動「土曜字級」に参加したのが契機で著者と出会い、以後今日までことばに尽くせないほど世話になってきた者である。よって、評者としては相応しくないかもしれない。しかし、著者の子どもものこころの臨床に一生

村上春樹著

『1Q84』

小林隆児

を擡げてきたこの四〇年あまりの生き様を最もよく知る者のひとりとして、本書の背景に流れる通奏低音を明らかにすることは、読者の理解の一助になるのではとの思いでみずから買ってしまった。読者の寛容を乞う次第である。

される。つまり、小説全体がその作中作の架空世界になっている。著者はなぜこんな手の込んだ入れ籠構造の小説を作ったのだろうか。

かつて異界というものは、水平に移動するだけで踏み込むことができず、明治以前の「遠野」のように、あるいはチェーホフの時代のギリヤーク人のように。しかしわれわれの現実というものは、たつた今においても、すぐその下には異界が存在する。多くはひっそりと、しかし時として、蓋が勢いよく壊れ、噴出したかのように、閉じ込められた異界が人々を襲うこともある。現在も存在するその異界の一つは家族の心の闇であり、またそれに深くかかわる闇の宗教（カルト）である。オウム事件が村上に深い衝撃を与えたことは疑いない。この小説自体が、オウム事件に対する村上の答えなのだ。この点は、後に触れるとして、問題は前者の闇である。この小説の中にはさまざま子ども虐待が登場する。またこのことこそ、筆者が「そだちの科学」でこの小説の書評という大それた試みを行う理由でもある。

めには、それがどのくらいリアルであるのかにかかっている。この小説に登場する子ども虐待は、その治療に専念してきた筆者からみて、息が詰まるまでに正確に描かれている。歪んだ家庭に育った子どもがその逆境を踏み越えるには、大きなハードルが存在する。子どもは愛着を作らずに生きていけない。どんなに家族を忌避していても、子どもが慣れ親しんだその世界は、子どもが生きてゆく基盤なのだ。虐待的な親との間に形成される愛着は、虐待的絆として子どもたちの中であって支配し続ける。

筆者は村上春樹のかなりよい読者ではないかと考えている。筆者は、村上氏とは同世代である。「風の歌を聴け」からはとんどの彼の主要な小説は読んできた。周知のように彼の小説はすべて、二重世界をテーマとしている。なぜ彼はかくもこの同じパターンに固執するのだろうか。

さてベストセラーの『1Q84』である。筆者にはこれが1Q（知能指数）84と読めてしまい、境界知能を主人公にした小説なのかと考えていた。この本は、最初のページに、ペーパーマンの歌詞が掲げら

れ、冒頭において、この小説の世界が、一九八四年でなく「1Q84」と主人公の女性が命名したもう一つの世界であることが開示される。要するに、何というか、この物語は架空世界だという作者の聞き直り、あるいはエクスキューズが冒頭から明らかにされている。しかも「1Q84」は、「空気さなぎ」という作中小説を中心に、二人の主人公が、最初は離れ、次第に交差して物語を紡いでいく。その登場人物たちは「空気さなぎ」という作中世界に絡み取られていくことが徐々に明らかに

か。エホバの証人については、筆者はDV家庭に入り込み、彼らが母親を支える役割を果たしているのを目の